明治期、大正前期における東京帝国大学本郷 キャンパスの外構整備について

Landscape Design at Tokyo Imperial University Hongo Campus in The Meiji Period and The Former Half of Taisho Period

西村 公宏*
Kimihiko NISHIMURA

摘要：明治期、大正前期における東京帝国大学本郷キャンパスの外構については、下記の2点が指摘できる。

1. 明治前期においては、既存庭園の改修が主体であり、営繕掛西郷元善や内科教授ベルツ等が関係しているが、ケヤキ並木等、複数の庭園を並木で結ぶ手法も見られる。
2. 明治後期、大正前期では、外構の継承と拡充がなされているが、これらは、浜尾新、本多静六等により進められ、学生が学業に親しめる環境がイメージされている。特にクスノキ並木(1903)やイチョウ並木(1906)は、東京帝国大学における造園学の成立期に実現した造園事例としても位置付けられる。

1. はじめに

今日、学術研究の高度化、社会人の学習ニーズの高まり等、高等教育機関を取り巻く状況は変化しており、文教施設についても、情報通信機能等による高機能化、多機能化と共に、人間性・文化性に配慮した、ゆとりとうるおいのある環境、すなわち、地域に開かれた緑豊かなオープンスペースや教育理念、伝統を踏まえた文化的環境が期待されている¹⁾。

この文化的環境は、時間の蓄積が可能な空間、具体的には歴史的建造物と緑地が一体となった空間等が考えられるが、建造物に比して緑地等の外構は、保存の基礎となる史的な位置付けがほとんどなされていないのが現状である。

例えば、東京大学の本郷キャンパスは、関東大震災後の内田祥三による整備構想を骨格としており、今日、ゴシック様式の建造物と共にイチョウ並木、育徳園(三四郎池)等の外構を見ることができ、震災前の外構については不明な点が多いことが指摘されている²⁾。

そこで、本研究では、関東大震災前の東京(帝国)大学本郷キャンパスについて、主に医学部の施設整備がなされた明治前期(明治9(1876)年～明治18(1885)年)と、本郷キャンパス全(医法文理工)学部施設の整備がなされた明治後期、大正前期(明治19(1886)年～大正6(1917)年)に分け³⁾、図版(一覧、アルバム等に掲載された図面、写真)、関係文書(新聞等)により外構整備の概要を把握し、さらに、関係文書(伺、新聞、回想録等)に見られる関係者と外構のかかわりから外構整備の実態を検討することにより、外構整備の特色を明らかにし、近代高等教育機関外構史の一端を補うことを目的としている⁴⁾。

2. 明治前期の外構整備(1876～1885)

東京大学医学部の前身である東京医学校は当初、神田和泉町の卑湿の地にあり、高燥の地を求めて上野への移転を計画するが⁵⁾、この地は最終的に公園及び博物館の敷地に決定したため、明治9(1876)年11月、本郷に移転し明治10(1877)年4月、開成学校と共に東京大学となる。

(1) 外構整備の概要

本郷キャンパスは、旧加賀藩邸跡、旧大聖寺藩邸跡、旧富山藩邸跡より構成されており、旧大聖寺藩邸跡に擬洋風の本館が、旧富山藩邸跡に教師館等が、旧加賀藩邸跡に第一医院が、それぞれ

木造で建設され、白色(漆喰等)が基調の建築群が出現しているが、外構整備の概要は下記のようなものであったと考えられる。

①医学部本館、教師館付近

医学部本館付近の外構は、前庭と中庭からなり、前庭は正門(鉄門)、車廻(タギョウショウ)、土塀(シバ)によるファサードを意識した構成になっているが(写真-1)⁶⁾、「加賀大聖寺藩の美しい庭園」⁷⁾も残されており、一方、中庭は整形園である。

教師館付近も、旧富山藩庭園(池泉等)が残されており、内科教授ベルツ邸庭園を中心に植栽がなされている。

②第一医院付近

第一医院前の、赤門(椿山等旧加賀藩庭園)と鉄門(旧大聖寺藩庭園)を結ぶ道沿いには、樹高1間(約1.8m)、径5寸(約17cm)程度のケヤキが植栽されている(写真-2)⁸⁾。

このケヤキ並木の「稚児の姿」⁹⁾は、明治11(1878)年11月の『東京醫事新誌』に描かれおり(図-1)¹⁰⁾、明治11(1878)年11月13日付の「郵便報知新聞」でも(病院前の)「柵内は樹木を植付け庭前の構造も亦美麗なり」¹¹⁾と報じている。

③育徳園付近

育徳園(旧加賀藩庭園)は、中央の心字の池のまわりに園路を配した回遊式であり、南西のサザエ(栄螺)山からは「品川の海まで見えた」¹²⁾と言われ、『東京醫事新誌』(1878)でも、「病院の背に出れば遊園あり萬樹翳鬱として稍々紅葉を帯ひ山林の中央に清池あり景色最も幽邃なり」¹³⁾と紹介している。

④その他

明治13(1880)年の「東京大學醫學部全圖」(図-2)¹⁴⁾と明治17(1884)年の「五千分の一東京図測量原図」(図-3)¹⁵⁾を比較すると、植栽が増し、園路の整備等も進んでいることがわかる。

(2) 外構整備の実態

この時期の営繕掛の「伺」には外構整備に関するものが見られ、ベルツも外構整備について日記に記している。

①営繕掛 西郷元善

東京大学附属図書館所蔵の明治初期医学部関係資料には、「営繕掛 西郷元善」による「伺」等が見られる。

西郷元善は、天保10(1839)年3月18日松本に生れ、開成所等を経て、明治4(1871)年6月17日大学出仕、明治14(1881)年7月7日東京大学1等書記、明治21(1888)年海軍省横須賀鎮守府建築部属員、明治28(1895)年に逝去している¹⁶⁾。

*茨城県県南地方総合事務所建築指導課

西郷起案による伺の内、外構整備に関する主なものは下記の通りである。

明治8(1875)年9月20日西郷起案、東京医学校長長與専齋から文部大輔田中不二麿に宛てた「樹木御渡方之義ニ付願」では、「當校本郷新築落成」に際し、「樹木植付太陽之直射ヲ防」ぐことから、「上野御用地内」にある「檜楡松等之類目通り七八寸廻ヨリ壹尺式三寸迄之品凡ソ式百五拾本程」の移植を、「樹木植替之氣節根廻シ等之都合」もあるので、「至急御裁可相仰」としている。

明治10(1877)年4月18日西郷起案、東京大學医学部総理心得長與専齋から文部大輔田中不二麿に宛てた「生徒体操器械設立處地之義」では、「生徒体操器械設立處地之儀ハ一日モ欠クベカラザルモノニ付」、「大學法學部」と共有で「當所庭園之東方朱引之場所、取設申度此段御伺候」としている。

明治10(1877)年6月12日西郷起案、東京大學医学部総理代理長與専齋から文部省會計課長辻新次に宛てた「當所庭園手入之儀」では、當所庭園(育徳園)は先般、會計課の修理以来、「雑草生茂り殊ニ枯枝」が多く損敗を増し、「病者散歩ノ不便不敷ニ付」、今後、医学部で時々修理することを照会している。

また、明治10(1877)年4月23日、用度課、宮繕掛、支給掛起案「當部鉄門之儀」では、「横浜六拾九番ホワイトフキールト」に注文した「鉄門代」として「洋銀五百弗内式百弗」を「相渡シ」としている。

これらの「伺」より、在来の庭園樹の活用、運動場の整備、散策用園路の修理、「鉄門」の購入等、具体的な外構整備は、西郷等、宮繕掛によりなされたと言えよう。

②ベルツの庭

エルウィン・ベルツは、1849年1月13日ドイツのビーティハイムに生れ、ライプチヒ大学等を経て、明治9(1876)年6月東京大学医学部の前身である東京医学校に着任し、以後、内科等の教授として日本の近代医学の発展に寄与し、大正2(1913)年8月31日に逝去している。

ベルツは日記において、明治9(1876)年6月26日に引越してきた教師館に「老樹の木立があつて非常に美しい」庭があり、明治9(1876)年10月25日までは自分の趣味どおりに「美しい庭」を作り、明治12(1879)年4月6日には「もと加賀の大名の私庭」である「大庭園の利用方法について、あれこれと計画を立てた」ことを述べており、日本の庭師の技術も高く評価している¹⁷⁾。

シュルツェ(外科教授、ベルツ邸西隣の教師館に居住)婦人も、教師館の中でベルツ邸が最も大きな庭園を有していたこと、教師館付近はサクラ(赤白の八重)、モモ、モクレン、キュウリ、ベニサンザシ、ツバキ等が植栽されており「一様に花の咲き乱れる庭園」であったことを手紙に記している¹⁸⁾。

(3) 外構整備の特色

明治前期の本郷キャンパスにおける外構整備の特色としては、下記の点が指摘できる。

①既存庭園の改修

本館前には「鉄門」や「タギョウショウ」が配され、第一医院前にも「美麗」な植栽がなされる等、ファサードの重視の施設整備が進められているが、旧加賀藩邸庭園、旧大聖寺藩邸庭園、旧富山藩邸庭園は、いずれも、改修を受けつつも保存されている。

西郷等の「伺」からは、限られた予算の中でのやりくりが窺えるが、「美しい」、「幽邃」等の既存庭園に対する肯定的な評価は、当時の嗜好の一端を示していると考えられ、西郷、ベルツ等による改修も、それに沿ったものと言えよう。

②並木の設置

第一医院前に植栽されたケヤキ並木は、育徳園と本館前庭を結んでおり、複数の庭園を並木で結ぶ手法は、明治11(1878)年の

段階で現出している。

なお、当時の街路樹はヤナギやサクラが多く¹⁹⁾、ケヤキ並木は、樹種においても先駆的であると言える。

3. 明治後期、大正前期の外構整備(1886~1917)

東京大学は、明治17(1884)年8月、本部事務室、法文2学部本郷移転、明治18(1885)年9月、理学部本郷移転、明治19(1886)年には帝国大学(明治30(1897)年より東京帝国大学)となり、明治21(1888)年7月、工科大学本郷移転、明治23(1890)年農科大学設置(東京農林学校併合)と、総合大学としての基礎を固めてゆく。

(1) 外構整備の概要

この時期の本郷キャンパスの建築は、法、文学部本館(明治17年竣工・コンドル)等、主要建築は赤レンガにより建設され、医科大学についても臨床医学系は木造であるが、基礎医学系は第一医院付近を中心に基礎と臨床が入れ替る形で赤レンガによる建築がなされ、本郷キャンパスは赤レンガ建築が主流になるが、これに対応する外構の概要は、下記のものであったと考えられる。

①医科大学附属医院(旧本館、教師館)付近

明治30(1897)年頃より教師館周辺の庭園は、産科、婦人科、小児科病室と一体となった遊歩場になっており(写真-3)²⁰⁾、明治45(1912)年までには、本館前庭、中庭も消滅し、直線園路を主体とした附属医院が整備されている。

②基礎医学教室(旧第一医院、赤門)付近

明治30年代に在来のケヤキ並木を生かす形で基礎医学系の赤レンガ建築(法医・解剖・病理・薬学教室)が建設されており(写真-4)²¹⁾、明治44(1911)年頃には赤門とツバキ山の間に資料編纂掛(旧医学部本館の一部)等が移築され補植がなされている。

③育徳園付近

明治27(1894)年頃に南側園路、明治39(1906)年頃には回遊式園路が整備され、池周辺は枯木、古木が残る(写真-5)²²⁾、運動場側は明るい疎林、芝生となっており、運動場東側にはサクラ並木も見られる。

また、明治32(1899)年頃に、サザエ(栄螺)山は消滅し、生理・医化学教室の建設が進められており、明治36(1903)年頃には池のある中庭が整備されている(写真-6)²³⁾。

④法、文、理、工科大学前庭付近

明治19(1886)年頃には既存の門と法、文2学部教室等の建物が曲線を主体とした園路で結ばれていたが、明治24(1891)年頃、仮正門(法、文科大学教室正面)の建設により前庭に正面性が生じ、明治28(1895)年頃には仮正門をやや北にずらすことにより前庭の中心軸及び各建物を結ぶ直線園路が整備されている。

植栽はサクラ、マツ、芝(クローバー)等が主体で、学生がくつろげる空間となっているが、明治40年(1907)頃には、中心軸のイチョウ並木(写真-7)²⁴⁾や、工科大学と図書館を結ぶイチョウ並木(写真-8)²⁵⁾が整備されている。

また、明治32(1899)年頃にはヒマラヤスギ、イチョウを有する工科大学中庭(写真-9)²⁶⁾が、明治36(1903)年頃には理科大学前庭が、明治39(1906)年頃には工科大学前庭が整備されており、この頃、理科大学と工科大学が直線園路で結ばれ、ケヤキ並木が植栽されている(写真-10)²⁷⁾。

なお、大正5(1916)年頃には理科大学化学教室前にヒマラヤスギが見られる。

⑤その他

東京帝国大学は、大正12(1923)年9月の関東大震災により多大な被害を被るが、当時の資料に『東京帝國大學構内震災類焼被害木調査、復舊保護手入並ニ被害樹木伐採』(1923 東京大学東京大学史料室所蔵)がある。

写真-1 東京大学医学部 (1881 頃)

写真-2 ケヤキ並木 (第一医院 1878 頃)

写真-3 医院遊歩場 (1910)

写真-4 ケヤキ並木 (医科大学 1906)

写真-5 育徳園 (1899)

写真-6 生理及醫化学教室中庭 (1910)

写真-7 イチョウ並木 (1911)

写真-8 イチョウ並木 (工科大学-図書館 1910 頃)

写真-9 中庭 (工科大学 1900)

写真-10 ケヤキ並木 (工科大学-理科大学 1910 頃)

写真-11 農学本校教室 (1877 頃)

図-1 ケヤキ並木 (第一医院 1878)

図-2 東京大学医学部全圖 (1880)

図-3 本郷元富士町近傍 (部分 1883)

これは、関東大震災により被災した構内樹木（イチョウ並木を除く）の調査報告で、庭園樹木 654 本の内、422 本の切戻と 220 本の伐採が提案されており、調査表の内容を整理して平面図におとした図-4 より、図書館周囲のシラカシや生理・医化学教室中庭のザクロ等、建物周りに多様な植栽が存在していたことが確認できる。

（２）外構整備の実際

『東京大学その百年』（1960）では、東京大学のシンボルの一つであるイチョウ並木について、明治 38(1905)年に当時の浜尾総長が「正門を入ったら万人自ら襟を正すような厳肅な雰囲気になりたい」との考えから、時の植物園長松村任三教授に命じてこれも植物園内の三好學教授の実験地にあった周囲約 30cm 内外の銀杏を移植したものであり、クスノキ並木も明治 36(1903)年に植えられたとしている²⁸⁾。

一方、小林(1978)では、本郷キャンパスのイチョウ並木は本多静六等により「パースペクティブの錯覚を利用して実際よりも奥深く見えるようにした」とされている²⁹⁾。

ここでは、浜尾、本多等の外構整備とのかかわりについて見ていくこととする。

①土木総長浜尾新

浜尾新は、嘉永 2(1849)年 4 月 20 日江戸豊岡藩邸に生れ、明治 2(1869)年慶応義塾入社、明治 3(1870)年大学南校入学、明治 5(1872)年大学南校廃学、同校生徒舎監事（文部省 12 等出仕）、以後、（東京）帝国大学総長（明治 26(1893)－30(1897)年、明治 38(1905)－大正元(1912)年）、文部大臣（明治 30(1897)－31(1898)年）等を歴任、大正 14(1925)年 9 月 25 日に逝去している³⁰⁾。

浜尾による外構整備はエピソードによって語られることが多く、「只濱尾道路と言はれる位に、大學内の道路を善くしたり、樹木を能く植ゑ込んだり、庭園を能く手を入れる人・・・庭園などには餘程趣味があつて、今日の東京大學の正門眞直の途に銀杏樹を植ゑたのだのも皆濱尾さんのやつた事だ」（中央公論）³¹⁾、「わが総長閣下が誠に心やすくわれわれの日常生活の中にあられていたのはどういうわけか。答えは簡単で、浜尾総長は何よりも学府の庭いじりが好きだったので、殆んど毎日のように、気軽に属僚の一人二人を随えては、あちこち見て廻っていたからである」（學士會月報）³²⁾、「池をさらひ、周りに路を作り石を据ゑたのも學生をなるべく散歩にも外に出さぬ總長の心くばりがあつたのだ」、「濱尾總長の時でして始めてこの大學へ印度から輸入されたヒマラヤ杉（今理學部の隣に残る）の小枝を挿木した・・・濱尾さんは植樹が好きで日曜日などよく一人で來られてこの附近（育徳園）の植込の指圖をしたものです」、「學生の氣が浮つくからとて櫻の木に代へるに楠以つてした」（帝國大學新聞）³³⁾等が掲げられ、これらから、土木総長と呼ばれた浜尾の外構観には自らの造園嗜好に加え、學生が學業に親しめる環境がイメージされていたことがわかる。

②本多静六と並木

本多静六は、慶応 2(1866)年 7 月 2 日埼玉郡河原井村に生れ、明治 23(1890)年 7 月東京農林学校を卒業、ドイツ留学を経て、明治 33(1900)年 6 月東京帝国大学農科大学教授、昭和 27(1952)年 1 月 29 日に逝去しており、日比谷公園（明治 36(1903)年開園）の設計を手掛けて以来、全国各地で公園の設計（改良）等に関係している³⁴⁾。

中村賢太郎著『本多静六先生』の「東京大学のイチョウ」では、浜尾が、正門から安田講堂にいたる並木の樹種について本多に相談したところ、本多はイチョウを選定し、明治 39(1906)年春、近野英吉の監督で、道路が延長されてから追加された奥の 4 本は、明治 45(1912)年宮田長次郎の監督でそれぞれ植樹され、赤門から病院へのイチョウも浜尾の注文で、宮田が大正 2(1913)年春実

行したことや、電車通りにあるクスの並木も、駒場でしたてた苗木を大正 2(1913)年、宮田が植樹したもので、本郷と駒場との融和をはかるひとつのシンボルであるとしている³⁵⁾。

本多自身も、「帝國大學新聞」に、不揃いな大きさのイチョウしか揃わなかったのを逆手にとり、「短い並木街道を長くみせる時に用ひられる方法」として大きいものを正門側に植え、以後順々に小さくして行くことにより、奥行きを出す事ができたとしており、クスノキについても駒場でしたてた苗木（二・三尺位）を植ゑたと述べているが³⁶⁾、クスノキ並木についてはなお諸説がある。

まず、村山達三(1959)「東大樟の並木」では、クスノキ並木について、「この並木は筆者は明治三十八年九月医科大学入学以来知って居り、見守って來た。昔は冬になると霜除をしたものだ。・・・二木謙三先生が昭和六年駒込病院長をやめた時、二木にちなみ、二本の木を記念樹に植ゑることにし、市公園課に相談、安行から植木屋が来て樟を植ゑた。・・・この植木屋と話をしている中に、大学の樟は自分で植ゑた、又日比谷公園のも同年に同園が出來た時、自分で植ゑたと言ひ出した。日比谷の角から公会堂辺迄帝国ホテルに面した通りのものだ。」としている³⁷⁾。

また、藤沢薬品創業者藤沢友吉は、明治 39(1906)年頃からクスノキ増植運動を展開し、各地にクスノキ苗木を進呈すると共に『楠樹栽培の手びき』（1927）を希望者に配布しているが、この中で、クスノキが実用のみならず風致樹としても好適で、日比谷公園に数百本にわたるクスノキ（苗木）の植栽を勧めたことや、大正 11(1922)年に大阪医科大学病院、同予科等にクスノキを寄贈したことを述べており、東京帝国大学については、「大正 15 年、東京帝国大学藤田先生」が記されているにすぎないが、『藤沢薬品八十年史』（1976）における編集の際の史料目録には、「明治 40 年頃、東京帝大農科大学演習林長川瀬善太郎先生の要望により苗木を領ち赤門中心に植ゑた」と言う伝聞記録が残されている³⁸⁾。

一方、松島種美（明治 44(1911)年 7 月理科大学植物学科卒業）は「園内植物學教室を巡りて」（1940）において「本郷正門内の見事なイテフは未だ植物園に育つて居り、正門表通り堀内に沿うて列ぶクスノキもやつと鐵柵上に梢を出して居たばかり」と記している³⁹⁾。

これらの記述より、イチョウは明治 39(1906)年頃、クスノキは明治 36(1903)年頃に植栽され、大正 2(1913)年前後に補植がなされた可能性が強いと言え、イチョウについては、不揃いな大きさしか揃わなかったことより植物園内からの移植が窺われ、クスノキについては、農科大学、その他で育成された苗木が集められたと推察される。

なお、正門と講堂の間に緑地を設け中心軸を並木で結ぶ手法は、農科大学駒場キャンパスに見ることができる。

農科大学の前身の（駒場）農学校では、設置の際に、正門から講堂に至る植物園内の園路にヒバが植栽されており（写真-11）

⁴¹⁾、これは「吾邦ニ於テハ従前造路学ノ設ケ無・・・東京市街ノ如キ常盤木或ハ桜木ノ類ヲ配植シテ・・・誇示得色アルモノ、如シ之レ実ニ並木ノ何ニ由テ然ル乎ヲ探求セズ・・・歐洲人ノ眼光ニ触レ反テ常ニ指笑ニ係ル処トハナレリ」⁴¹⁾と言う観点から植栽されたものと考えられる。

農科大学教授の本多はもちろん、浜尾新も文部省専門学務局長時代に東京農林学校の併合による農科大学の設置に尽力したと言われており⁴²⁾、二人にとって中心軸の並木はなじみのある外構であったと推察される。

本多は大正 2(1913)年に『行道樹篇附緑陰樹』を著し、「日本市街行道樹」の「一級」としてイチョウをあげており、「春窓ノ下出デハ薫風短袴ヲ翻ヘス緑陰ノ蔭ニ歩々知識ノ世界ニ導カレシ・・・道路其他ノ廣場殊ニ學校ノ廣場ニ此日除樹ヲ植栽センコトヲ勸ムルモノナリ」としていることから⁴³⁾、浜尾と同様、その外

図-4 本郷キャンパス内樹木被災状況 (1923)

表-1 園藝學、景園學講義ノート目次等

園 藝 學 目 次 等	景園學目次 (田村林学士ニヨル) 等
園藝學 Horticulture / 語源 (裝飾ニ関スル技藝及ビ學術、庭園等) 吾園藝ノ狀況 輸出ノ狀況 (庭木、植木の刈込等) 内地ノ果物蔬菜花卉庭木ノ用途 (洋花の配色等) 園藝學課別 Fruit Culture (果樹栽培) Vegetable Culture (蔬菜) Flower Culture (花卉) Landscape Gardening (造庭) 果樹 (pp1-367) 蔬菜 (pp368-427) 花卉 (pp428-435) (Annual Plants, Tree of Shurab, Leaf plants and Greens等) 花壇 (pp436-439) (Bordeur, Parterre, Corbeille等) 盆栽 (pp439-443) (日本盆栽、西洋盆栽) 並木 (pp444-449) (概説、樹種等) 庭園ニツイテ少々 (pp450-456) Style (regular garden, irregular garden等) 園及風景園 (Landscape Garden, Parce 等)	第一章 景園ノ義解 第一節 景園ノ範圍 第二節 景園美 第三節 景園特ニ造園ノ種類並ニ様式 第二章 景園ノ沿革 第一節 西洋景園史 第二節 東洋景園史 1. 支那景園史 2. 朝鮮景園史 3. 日本景園史 第三章 景園ノ材料 第一節 自然材料 第二節 人工材料 第四章 景園ノ築造 第一節 築造ノ根本原則 第二節 局部の築造 第五章 景園ノ設計 第六章 景園ノ問題 第一節 庭園 A 風景的庭園 a 写實的庭園 (縮景的庭園) b 理想的庭園 c 便化的庭園 B 建築的庭園 第二節 公園 A 風致的公園 a 写實的公園 b 理想的公園 c 便化的公園 B 建築的公園 第三節 天然公園 附 森林修飾 第四節 名勝舊跡天然紀念物保存並ニ遊園地ノ設計 第五節 社寺風景林 附 墓地 第六節 學校病院、停車場其他公共的建築ノ修飾 第七節 都市ノ修飾 附 田園都市、公園都市 第七章 施工 第八章 管理

構観には、学生が学業に親しめる環境がイメージされていたと言えよう。

③外構整備と造園学

イチョウ並木等が整備された明治後期より大正前期にかけては、東京帝国大学農科大学において、造園学が成立した時期でもあった⁴³⁾。

明治 28(1895)年 7 月に農科大学農学科を卒業した廣瀬次郎の在学中の講義ノート「園藝學」(教授玉利喜造、講師福羽逸人 東京大学農学部所蔵)には、「園藝學」の一分科として「庭園 Landscape gardening」があげられている。

また、大正 7 (1918)年 7 月に農科大学農学科を卒業した山瀬靖の在学中の講義ノート「HORTICULTURE PROF.HARA」(東京大学農学部所蔵)及び、千葉県立園芸専門学校を大正 2 (1913)年 3 月に卒業し、大正 6 (1917)年 9 月「景園學」を聴講した森歙之助による「庭園美稿」(森家所蔵)の目次等をまとめたの

が表-1 であるが、「学」としての造園の体系化が試みられており、特に「庭園美稿」においては、一部、鉛筆書きで「景園學」の「景」が「造」に直されており、まさにこの時期は造園学の成立期と言えよう。

ところで、本多等による造園学の契機は日比谷公園であると言う指摘も見られるが⁴⁵⁾、ここで、日比谷公園の構成要素を検討すると、メイン園路のイチョウ並木、前面道路沿いのクスノキ並木、心字池等、本郷キャンパスと共通するものが多い。

本郷キャンパスにおけるイチョウ並木等の外構整備は、造園学の成立期に実現した造園事例としても位置付けられよう。

(3) 外構整備の特色

明治後期、大正前期の本郷キャンパスにおける外構整備の特色としては、下記の点が指摘できる。

①外構の継承と拡充

ファサードの重視はこの時期も変わらず、法、文科大学等の複数

の建物に囲われた空間に、サクラ、マツを主体とした前庭が整備され、各建物の周囲にも多様な植栽が見られるが、既存庭園の改修による遊歩場の整備も進められており、これらを繋ぎ並木についても、従来のケヤキ並木にイチョウ、クスノキ並木が加わり、拡充が図られている。

②並木と造園学

これらの外構整備は、浜尾新、本多静六等により進められ、学生が学業に親しめる環境がイメージされている。

特に明治30年代に植栽された、クスノキ並木(1903)やイチョウ並木(1906)は当時の街路樹としては一般的でなく⁴⁶⁾、東京帝国大学における造園学の成立期に実現した造園事例としても位置付けられる。

4. おわりに

明治期、大正前期における本郷キャンパスの外構整備の特色は、外構の継承と拡充にあることが明らかになったが、これは震災復興期の内田祥三等による施設整備に受け継がれ、今日に至っていると言える。

現在、本郷キャンパスでは「歴史的な環境を継承する」再開発が進行しているが⁴⁷⁾、すでに著名である三四郎池(育徳園)やイチョウ並木と共に、本郷キャンパスの並木の嚆矢とも言える医学部中央館(図書館)前のケヤキ並木等についても積極的な保存策が望まれよう。

補注・文献

- 1) 佐川政夫(1994): 国立大学キャンパスの現状と展望: 建築雑誌, 109, 28
- 2) 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会(1988): 東京大学本郷キャンパスの百年: 同館, 5, 7, 109-113, 157-160
- 3) 明治19(1886)年の「帝国大学令」と大正7(1918)年からの「高等教育機関創設及拡張計画」を画期とした。大正期の本郷キャンパスの外構は、『東京帝国大学一覧』に掲載された図版(写真, 平面図)で見る限り、大正後期に大規模な外構整備は行われておらず、大正前期とほぼ同様の外構であったと考えられる。
- 4) 本研究では、「外構」を「緑地等のオープンスペースと建造物のファサードが創出する外部空間」と規定し、すでに教育史等において既知となっている東京大学の通史に関しては『東京大学百年史』(1984, 1985)によるものとする。
- 5) 東京大学医学部創立百年記念会(1967): 東京大学医学部百年史: 同会, 231
- 6) 堀越三郎(1929): 明治初期の洋風建築: 丸善, 156, 復刻(1973): 南洋堂書店
- 7) 林春雄(1933): 鐵門と鐵門俱樂部身上話: 鐵門12(2), 2
- 8) 9) 鐵門俱樂部(1932): 教室巡りー林部長の巻ー: 鐵門11(2), 口絵, 46-48
- 10) 東京警事新誌(1878): 警事雜報: 同37, 口絵
- 11) 郵便報知新聞(1878): 明治ニュース事典編纂委員会(1983): 明治ニュース事典2: 毎日コミュニケーションズ, 485
- 12) 入澤達吉(1929): 明治十年以後の東大医学部回顧談: 鐵門8, 64, 103-104
- 13) 東京警事新誌(1878): 前掲書38, 30
- 14) 東京大学醫學部(1880): 東京大学醫學部一覧: 同, 口絵
- 15) 勸日本地図センター(1984): 五千分の一東京図測量原図: 同
- 16) 西郷家の御教示, 東京大学所蔵の資料による。
- 17) トク・ベルツ編菅沼竜太郎訳(1979): ベルツの日記: 岩波書店3-8, 24-25, 42, 45, 77
- 18) トスカ・ヘゼキール(編)北村智明, 小関恒雄(訳)(1986): 明治初期御雇医師夫妻の生活ードクトル・シェルツェ夫人の手紙ー: 日本警事新報3223, 70-73
- 19) 白幡洋三郎(1995): 近代都市公園史の研究: 思文閣, 310-311 なお、ケヤキ並木の古い事例では馬場大門(1050-)等があるが、近代市街地における植栽は明治神宮表参道(1921-)等、主として大正期からである。三浦伊八郎(1928): 並木: 雄山閣, 5, 34, 35, 147
- 20) 東京帝国大学醫科大學(1910): 紀念帖: 同
- 21) 東京帝国大学(1906): 東京帝国大学一覧從明治三十九年至明治四十年: 同學, 口絵
- 22) 須藤憲三が東京帝国大学助手, 助教授時代(明治27(1894)年ー明治45(1912)年)に構内等を撮影した写真資料による。岩崎憲太郎博士所蔵, (株)学習研究社資料室にて保管。
- 23) 東京帝国大学醫科大學(1910): 前掲帖
- 24) 東京帝国大学(1911): 東京帝国大学一覧從明治四十四年至明治四十五年: 同學, 口絵
- 25) 須藤: 前掲資料
- 26) 小川一真(1900): 東京帝国大学: 小川寫真製版所
- 27) 須藤: 前掲資料
- 28) 東京大学出版会(1960): 東京大学その百年: 同会, 1-3
- 29) 小林秀弥(1903): 大学のキャンパス計画: 彰国社, 102-103
- 30) 吉家定夫(1981): 修業時代の浜尾新: (慶応義塾大学修士論文), 年表
- 31) 佐々醒吾, 和田垣謙三(1910): 濱尾總長と菊池總長: 中央公論, 166-168
- 32) 高木市之助(1960): いちょう(銀杏)並木の育つ頃: 學士會月報, 672, 37-39
- 33) 帝國大學新聞 大正14(1925)年9月28日, 大正15(1926)年12月6日, 昭和13(1938)年5月23日
- 34) 35) 中村賢太郎(1962頃): 本多静六先生: (私家版), 348-351, 367-368
- 36) 帝國大學新聞 昭和11(1936)年11月16日
- 37) 村山達三(1959): 東大樟の並木: 學士會月報, 669, 16-17
- 38) 元東京大学営繕課田中二郎氏, 藤沢藥品工業㈱服部昭氏のご教示による。
- 39) 東京帝国大学理學部植物學教室(1940): 東京帝国大学理學部植物學教室沿革: 同教室, 335
- 40) 講農會(1913): 講農會廿五周年記念號: 同会: 口絵
- 41) 安藤圓秀(1966): 駒場農学校等史料: 東京大学出版会, 138
- 42) 今井登志喜(1935): 大學教育の功勞者としての濱尾先生: 教育3(9), 80-81, 87
- 43) 本多静六(1913): 行道樹篇附綠陰樹: 三浦書店, Ⅲノ29, 216 なお、本多はケヤキについても「校舎の周圍に又は並樹として植栽するを可とす」としている。本多静六講演, 本郷高德筆記(1905): 學林樹裁法講話: 早稲田農園, 46
- 44) 東京帝国大学では、大正5(1916)年頃より公開講座として「景園學」(総論: 本多静六, 東洋景園史: 本郷高德, 西洋景園史: 田村剛)が、大正8(1919)年9月からは農学部において「造園學」(造園総論, 公園論: 本多静六, 庭園論: 原)が開講している。井手久登等(1986): 造園学: 朝倉書店, 17, 30 なお、本多静六も『日本農業教育史』において、福羽逸人が「園芸学なる講義の内、庭園特に花壇杯に就いて言及して居た」こと、さらに本多自身も「明治四十年頃から造林学の終りに森林美学という名称の下に、造園学の講義を初めた」ことを述べている。全国農業学校長協会(1940): 日本農業教育史: 農業図書刊行会, 725
- 45) 日比谷グリーンサロン(1994): 日比谷公園学講座(勸東京都公園協会, 30, 62, 67(進士五十八 緑の自由空間他)
- 46) 街路樹としてイチョウが注目されるのは、明治39(1906)年の白沢保美, 福羽逸人による東京市内街路樹の改良の研究以降である。白幡(1995): 前掲書
- 47) 東京大学工学部建築計画研究室編(1996): 大学の空間: 鹿島出版会, 146

Summary: The aim of this study is obtain the character of Landscape design at Tokyo Imperial University Hongo Campus in The Meiji Period and The Former Half of Taisho Period. The major findings are as follows:

The design's central element were avenue(gingko,zelkova,camphor) and Japanese landscape garden in the go-round style.

SAIGO Motoyoshi,ERWIN BÄLZ,HAMAO Arata and HONDA Seiroku played an important role in the formation of Landscape design at Hongo Campus.